

セミナー
「小学校受験で成功する子育て法」part4
2009/6/28



ウエルストリーム

2009(C) Well Stream Inc. All Rights Reserved

受験を成功させる3つのポイント

本日のテーマ

「家庭で子どもとどう接すれば受験が成功するか？」

- 1、習慣の力
- 2、PDCAサイクル
- 3、今やるべきこと、やってはいけないこと。

受験を成功させる3つのポイント

1、習慣の素晴らしさ

(1)意思の力

①「子どもにはこうなって欲しい。」というご両親様の意思
お子様をどう育てたいのですか？
30年後どういう社会人になって貰いたいのですか？
そのための子育て方針は立てていますか？

②「自分はこうなりたい。」というお子様自身の意思
お子様は「自分がどうなりたいか？」言えますか？

(2)習慣の力

人は習慣にすると、かなり大変なことも苦もなくこなせるようになる。
「〇〇する習慣」ー子育ての根幹。

①訓練

②技術



受験を成功させる3つのポイント

(3) 意思の力と習慣の力で最後までやり抜く。—このさいやっつてのける。

偉人の例: エジソン、キュリー夫人、

ヘレン・ケラーの家庭教師サリバン先生。

インディアンの雨乞祈禱師の例

合格 = 受験成功

受験を成功させる3つのポイント

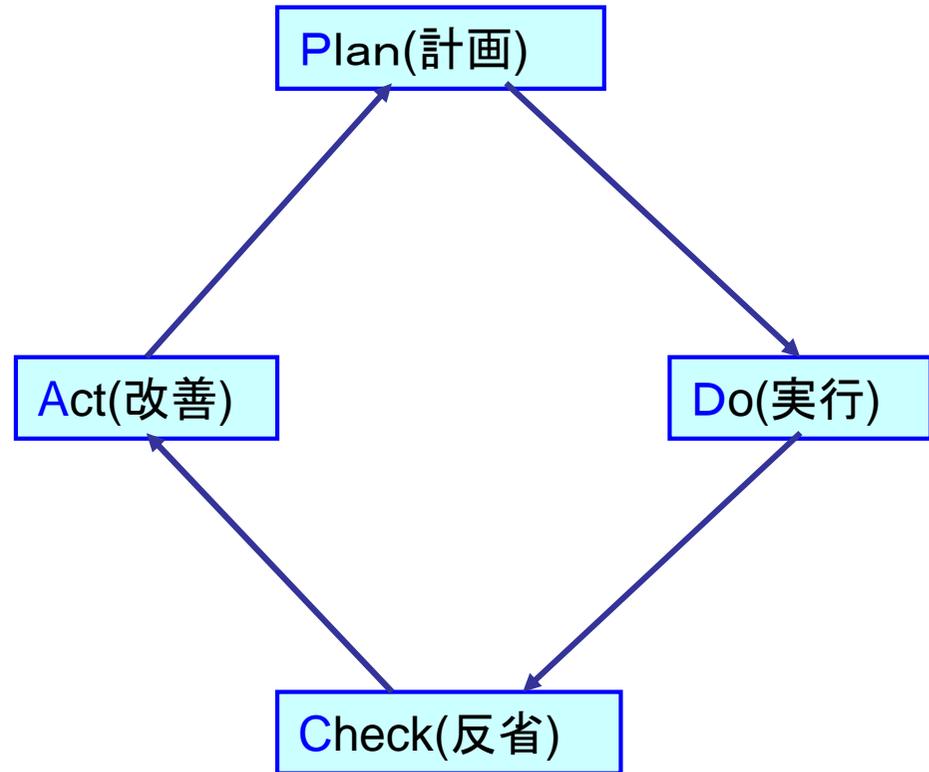
2、PDCAサイクル

ー反省なくして進歩・改善なし、
進歩・改善なくして成功・発展なし。
受験も子育ても仕事と同じで

Plan(計画)→Do(実行)→
Check(検証・反省)→Act(改善)

(1) Plan(計画)

- ①まず、目標設定をする。
現時点でのおおよその志望校を決める。
- ②その志望校に**確実に合格する**ためには何がどの程度要求されているかを把握する。
- ③そして、現状を分析し将来予測に基づき目標達成のための計画を作る。長期中期、短期に分けて受験準備の計画を立てる。



受験を成功させる3つのポイント

(2) Do(実行)

- ①計画に沿って受験準備を実行。
- ②計画通りに実行するご家庭での工夫
- ③小学校受験では実行力＝親の力90%

(3) Check(検証・反省)

作った計画を実際に行ってみて、その結果を検証し、反省すべき点を書き出す。

* 自己反省が弱い例

- ①「〇〇模試は問題が良くない。だから、成績が悪かった。うちの子はもっとできているはず。」—そう言っでは、毎月いろいろな模試を受ける人。
- ②「行動観察の時間にお友達とおしゃべりをしてしまい。先生の指示を聞いていなかったので不合格。」—たまたま同じグループに素行の悪いお友達がいたので巻き添えになった。
- ③「〇〇だからしょうがない。」が口癖になっている家庭。

受験を成功させる3つのポイント

(4) Act(改善)

Checkで書き出した反省点はすべて改善点になる。反省点をたくさん見つければ見つけるほど、そのお子様は改善される可能性が高まり、進歩・成長できる。

具体的に何をどう改善するかを計画を立てる。(日々改善)

また、ときには当初の計画の修正も必要。

* PDCAサイクルを受験勉強や子育てに適用する場合には

「そうは言っても……」

「まあ、ええんとちがいますか～？」

そういう「寛容・余裕」の部分もある程度は必要

受験を成功させる3つのポイント

3、今やるべきこと、やってはいけないこと。

(1) 今やってはいけないこと

① 今から全く新しいことに手を広げること。×

御父母様の不安・焦りから

問題集をできそうもないほどたくさん買いこむ。

他のお教室に今から通い始める。

自己発信対策と言って、新しい習い事を始める。

② 「〇〇ちゃんはこれこれこういう子なのよね。」と決めつけて周囲がレッテルをはると、ますますそうなる。×

マイナス方向では **ラベリング理論**—アメリカの犯罪学の理論

無意識的にお子様にマイナスラベルを貼っていませんか？

⇔プラス方向では**ピグマリオン効果**、**エンデュミオン効果**

③ 落ちることを前提(仮定)とした行動(言動)をとる ×

不幸な結末を予言すること。—**予言の自己成就**

「やるだけやって、ダメだったらしょうがない。近くの〇〇小学校に行けばいい。」

受験を成功させる3つのポイント

「10月で落ちたら、11月にまた受けなくちゃいけないから、連休は旅行に行けないね。」

④根拠のない噂話や出所不明の未確認情報を本気にする。×

⑤お子様の受験についての意見の不一致や不安から家族で言い争いする。×

例:「だから言っただろう。意味がないって。」

「俺は(私は)はじめから反対だった。」

(2) 今やるべきこと

①日々の生活スケジュールの見直し(平常月と夏休みとを分けて)、合格につながる良き学習習慣・生活習慣づくり。○
学習時間の絶対量の確保。量は質に転化する。

②志望校の校風を正確につかむ○
ーオープンスクールや説明会に参加し、自らの五感で確認する。

受験を成功させる3つのポイント

- ③家族全員が協力して、お子様の**苦手科目、苦手分野の克服**をする。○
あるお母様の例:「うちの子、縄跳びができないんですよ。」
—ずっと放っておいて、第1志望の開智(入試)で案の定「縄跳び」が出て、
当日やはり出来ず、不合格。—それでいいんですか？
- ④受験勉強をきっかけとして、お子様の心も成長(「**自立**」と「**自律**」)し、
精神年齢があがってきた。○
受験勉強をさせたら、「人」としておかしくなった。×
「受験勉強をすることにより、以前より随分しっかりしてきた。お兄さん
(お姉さん)になってきた。」○
「我慢が大事」と言って、我慢強くなった。○
「すすんで自分のことは自分でするようになってきた。」○
- ⑤支えている家族全員に対して感謝の心を持つようになった。○
—はじめは形から入っていったが、今は心がともなってきた。

受験を成功させる3つのポイント

参考資料

PDCAサイクル

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

PDCAサイクル(ピーディーシーエーさいくる, PDCA cycle, plan-do-check-act cycle)は、**工業**(**製造業**や**建設業**)などの**事業**活動において、**生産管理**や**品質管理**などの管理業務を計画どおりスムーズに進めるための**管理サイクル**・**マネジメントサイクル**の一つ。

概要

PDCAサイクルは、第二次大戦後に、品質管理を構築した**ウォルター・シューハート**(Walter A. Shewhart)、**エドワーズ・デミング**(W. Edwards Deming)らによって提唱された。このため、**シューハート・サイクル**(Shewhart Cycle)または**デミング・サイクル**(Deming Wheel)とも呼ばれる。

PDCAサイクルという名称は、サイクルを構成する次の4段階の頭文字をつなげたものである。後年、デミングは入念な評価を行う必要性を強調してCheckをStudyと置き換え、PDSAサイクルと称した。

Plan (計画): 従来の実績や将来の予測などをもとにして業務計画を作成する。

Do (実施・実行): 計画に沿って業務を行う。

Check (点検・評価): 業務の実施が計画に沿っているかどうかを確認する。

Act (処置・改善): 実施が計画に沿っていない部分を調べて処置をする。

この4段階を順次行って1周したら、最後のActを次のPDCAサイクルにつなげ、**螺旋**を描くように一周ごとにサイクルを向上(**スパイラルアップ**, spiral up)させて、**継続的な業務改善**をしていく。この考え方は、**ISO 9001**、**ISO 14001**、**ISO 27001**、**JIS Q 15001**などの管理システムや、ソフトウェア開発における**スパイラルモデル**を始めとする**反復型開発**などにも反映されている。また労働安全マネジメントシステムでは、これらのISOと同様なPDCAサイクルを活用して危険元凶を特定しリスクアセスメントを行うことでリスク低減を継続的に実施している。

ビジネスシーンにおいては、このPDCAサイクルを生産工程だけでなく汎用化させ、「仕事の基本」を表すためにも用いることが多い。綿密に計画を立て、そのとおりに(軌道修正しながら)実践し、結果を評価し、改善し、次につなげるというサイクルは、過不足なく仕事の流れを簡潔に言い表している。特に新人教育などで事例を交えながら説明すると、仕事をどう進めるべきかが理解しやすい。

管理サイクル(PDCAサイクル)は**フィード・バック**手法であり、計画の実施の結果を見て計画を修正するやり方である。これを繰り返せば完全な計画に接近することになるので、これをもって「管理とは、管理サイクルを回すこと」と記述する研究者もいるが、それは誤りである。なぜなら、大金を投資する事業計画など失敗の許されない活動の計画を立てた場合(P)、実施して(D)、結果が失敗であれば(C)、反省しても既に遅く失敗の損害は回復(A)できない。PDCAサイクルは、一旦始まったら引き返せない、あるいは失敗の許されない計画には使えず、一般的な管理手法ではない。

PDCA管理サイクルは、(例えば、QCサークル活動や日常管理に適用して)少しずつできるだけ向上させることが主旨であり、目標を設定しないのが普通である。なぜなら、目標を設定するためには、事前に結果と最善性を保障した手段の確定が必要になるが、手段を確定するなら管理サイクルを回す必要性がないことになるからである。

これに対して、**フィード・フォワード**手法は、失敗の許されないような計画で、「渡る前に石橋を叩く」やり方である。例えば大金を投資する場合や失敗が許されない場合には、事前に結果が分からねばならないし、最善を選択しなければならないから、「やってみて、結果によってアクションを考える」というPDCA管理を適用することはできない。そこで、フィード・フォワードでは、解決手段(代替案)をすべて列挙した上で、投資額、効果、弊害などを数値化し、これらのデータに基づいて採否を決める。採用案を決めることは、狙いを定めることでもあるので、これを**目標設定**という。このやり方は、方針管理に適用されることが多い。ただし、全体として失敗の許されないプロジェクトも、そのプロジェクトが反復される場合には、付随する小さな問題点については管理サイクルが適用され、反復の都度改善される。

受験を成功させる3つのポイント

参考資料

ピグマリオン効果

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

ピグマリオン効果 (ピグマリオンこうか、英: pygmalion effect) とは、**教育心理学**における心理的行動の1つで、**教師**の期待によって**学習者**の**成績**が向上することである。なお、教師が期待しないことによって学習者の成績が下がることは**ゴーレム効果**と呼ばれる。ピグマリオン効果は、別名、**教師期待効果** (きょうしきたいこうか)、**ローゼンタール効果** (ローゼンタール効果) などとも呼ばれている。なお批判者は**心理学用語**での**バイアス**である**実験者効果** (じっけんしゃこうか) の一種とする。

概要

ピグマリオン効果については、**人間**は期待された通りに成果を出す傾向があることの現れとされ、**1964年**に**アメリカ合衆国**の教育心理学者**ロバート・ローゼンタール**によって**実験**された。ピグマリオンという名称は、**ギリシャ神話**を収録した古代ローマの**オウィディウス**『**変身物語**』 (“Metamorphosen”、訳に『**転身物語**』とも) 第10巻に登場する**ピュグマリオン**王の恋焦がれた女性の彫像が、その願いに応えた**アプロディテ**神の力で人間化したと言う伝説に由来する。

動物におけるピグマリオン効果 **[編集]**

1963年ローゼンタールとフォードが大学で心理学の実験で、学生たちにネズミを使った迷路実験をさせるのに、ネズミを渡す際に、これはよく訓練された利巧な系統のネズミ、これはまったくのろまなネズミといって渡したところ、その二つのグループの間で実験結果に差異が見られた。前者のネズミを渡された学生たちは、ネズミを丁寧扱い、後者のネズミを渡された学生たちは非常にぞんざいに扱い、その両者のネズミへの期待度の違いが実験結果に反映されたものとローゼンタールは考えた。そこで、これは教師と学生の間でもありうるのではないかと考えた。

人間におけるピグマリオン効果 **[編集]**

1964年春、教育現場での実験として、サンフランシスコの**小学校**で、ハーバード式突発性学習能力予測テストと名づけた普通の知能テストを行ない、**学級担任**には、今後数ヶ月の間に成績が伸びてくる学習者を割り出すための検査であると説明した。しかし、実際のところ検査には何の意味もなく、実験施行者は、検査の結果と関係なく無作為に選ばれた児童の名簿を学級担任に見せて、この名簿に記載されている児童が、今後数ヶ月の間に成績が伸びる子供達だと伝えた。その後、学級担任は、子供達の成績が向上するという期待を込めて、その子供達を見ていたが、確かに成績が向上していった。報告論文の主張では成績が向上した原因としては、学級担任が子供達に対して、期待のこもった眼差しを向けたこと。さらに、子供達も期待されていることを意識するため、成績が向上していったと主張されている。この詳細がまとめられた報告書は、Rosenthal, R. & Jacobson, L.: "Pygmalion in the classroom", Holt, Rinehart & Winston 1968として刊行された。

受験を成功させる3つのポイント

参考資料

予言の自己成就<よげんのじこじょうじゅ> *self-fulfilling prophecy*

たとえ根拠のない予言(=噂や思い込み)であっても、人々がその予言を信じて行動することによって、結果として予言どおりの現実がつけられるという現象のこと。例えば、ある銀行が危ないという噂を聞いて、人々が預金を下ろすという行動をとることで、本当に銀行が倒産してしまう、というもの。このような社会現象のメカニズムを、アメリカの社会学者マートンは「予言の自己成就」と名付けた。これは、W・I・トマス「もし人が状況を真実であると決めれば、その状況は結果において真実である」という定理をさらに展開した理論といえる。

ラベリング理論

社会学者H・S・ベッカーが構築した理論で、しばしば逸脱理論として適用される。ある人物の特性は、その人物の行為ゆえというよりも、周囲から貼られる特定のレッテルによって決められる。ひとたびレッテルが貼られると(ラベリング)、その人物はそのラベリングのもとにアイデンティティと行動パターンを形成するようになる、という理論。

大切にしている詩 Yes, I can.

できると思う心のどこかに
無理かもしれないと思う心があると
つぎからつぎに無理がでてくる
負けるかもしれないと思う心があると
そこであなたは負ける
もうだめだと思ふ心があると
そこからあなたはダメになる
失敗しそうだと思ふ心があると
あなたは確かに失敗する

成功している人をみなさい
最後まで成功を願ひ続けた人だけが
成功しているではないか
すべては「あなたの心」が決めるのだ

もしあなたがそうしたいのなら
あなたはその通りのことができる

さあ出発だ
強い人が必ず勝つとは限らない
すばしっこい人が勝つとは限らない
頭の良い人が勝つとは限らない

Yes, I can.

「わたしはできる。」
そう信じている人が結局は勝つのだ
Yes, I can